2019.10.31

研究費の不正

小嶋祥三

『週刊新潮』が京大・霊長類研究所の元教授・松沢哲郎（現・高等研究院特別教授）と教授・友永雅己がチンパンジーの研究費を不正に扱ったと報じていた。文科省から研究費の返還を求められた場合、その額は最大 20 億円に達するという。この問題は、わたしが研究所を去ってから起こったので、その詳細については知らない。

このホームページの『残照記』の「研究生活から」で、わたしは両氏が著者に名を連ねているチンパンジーのじゃんけんに関する論文を批判した（『チンパンジーのじゃんけん』、『ノーベル賞から』、『再び唖然』）。フツーの研究者ならすぐに分かる欠点だらけの研究、論文がマスコミでもてはやされたり、雑誌 Primates で award を受けたり、はては京大の「総長賞」を受けたりしていた。わたしは両氏の研究姿勢に疑問を持ち、その荒廃を感じたので批判した。最後の『再び唖然』の文章の終わりは、以下のようになっている。

・・・・京都大学も、霊長類研究所も、日本のチンパンジー研究も、Primates 誌も評判を落とすことになる。わたしが心配しているのは、霊長類研究者がこのような奇妙なことに意見を述べていないことである。黙らざるを得ない雰囲気なのだろうか。それとも、そうやって着飾っていれば、研究所に研究費がくるので黙っているのだろか。このようなことでは、霊長類研究の将来は明るくないと、心配である。

今回の問題はチンパンジーのじゃんけんの論文と直接の関係はない。しかし、管理を含め、研究にきちんと向き合っていないことは、共通している。どうも、研究費がくるどころか、止められてしまうようだ。両氏はもとより、京大も、霊長研も責任を問われることになるだろう。不幸にも、心配が当たってしまったようだ。残念である。